

流通とSC・私の視点

2011年7月14日

視点(1423)

檄文：SCは平和産業!!

SCは20世紀が生んだ最強の流通業態として登場しました。その背景は、大量生産→大量販売→大量消費の**経済システム**と、モノを買い、消費し、所有し、利用することの連続性に幸せを感じる**中産階級層**の出現（モダン消費社会）と、**車社会**の到来、さらには地方から都市さらに郊外への**人口大移動**の4本のSCを成立させた柱が出現したことです。

18世紀から19世紀にかけて起こった産業革命は大量生産システムが可能となり、モノが溢れる社会が実現しましたが、当時はモノを消費するシステムが経済的に確立されていませんでした。それゆえに、イギリスを中心としたヨーロッパの烈強（フランス、ドイツ、ロシア、イタリア）や新興国アメリカが、大量生産されたモノを消費（あるいはモノの原料確保）するため、弱体国家を植民化しました。いわゆる「**帝国主義国家時代**」です。

しかし、第2次世界大戦後、植民地で民族主義運動が高まり、軍事的に民族主義運動を押さえつけることは不可能となり、次々と植民地は独立しました。この現象は植民地が独立したと言うより、帝国主義国家が、「費用」（軍事力による支配に伴う費用）と「成果」（植民地から搾取する成果）の差がマイナスになり、植民地を手放した方が得であると判断したことも事実です。第2次世界大戦後、それまでの帝国主義国家の真似をし、共産主義化による属国をたくさんつくったソ連は、植民地から得るものがなく、むしろ経済や軍事負担の増大で、最後はソ連は国家が崩壊しました。このソ連が行った共産主義による属国化を共産帝国主義と言います。

さて、植民地を放棄した先進国（欧米日の烈強国）は、その後の経済復興により、国内に中産階級を誕生させ、消費が高まり経済的繁栄を達成しました。その結果、旧植民地の国民より、1人当たり所得（1人当たりGDP）は、10倍～30倍以上高まり、旧植民地の消費力をはるかに上回る消費を国内で調達できるようになり、国内で大量生産→大量販売→大量消費のシステムが確立され、国際間においては得意分野のみの輸出入で補い合う体制ができました。その結果、先進国は大いに繁栄し、人々の生活は飛躍的に豊かになりました。この中産階級による大量消費は、小売業という販売経路を通じて行われ、その中心になったのが「**SC**」です。アメリカでは小売業に占めるSCの売上が60%、日本や西欧でも20%を超え、やがて30%になろうとしています。SCは流通業の覇権業態になりました。

先進国は、もはや植民地というマーケットを軍事的に支配して確立させるのではなく、国内の国民の所得を高め、消費を多くし、国民の生活を豊かにすることによってマーケットを創出しました。その中で「**中心的役割を果たしたSCは平和産業**」なのです（六車流：流通理論）。

日本も過去に欧米烈強と中国マーケットをめぐる帝国主義戦争を行い、戦争に敗れ、中国マーケットを失いました。しかし、戦後日本の経済は飛躍的に高まり、世界第2位の経済国家になりました。しかし、2010年度に、中国に世界第2位の地位を譲ることになりましたが、日本1.3億人の人口に対し、中国は13億人の人口であり、国内総生産は同じでも1人当たり所得格差は10倍あります。日中の格差は20年前は40倍でした。中国の10～40倍の1人当たりの消費力を国内に持つことにより、日本は脱帝国主義・脱植民地主義国家となり、平和を維持しつつ豊かな国になりました。さあ、これからは日本と中国、それに隣国の韓国や台湾と合わせた大経済規模（ほぼアメリカに相当）により、一大経済圏を築きその中核国家として再度大発展しようではありませんか!!

(株)ダイナミックマーケティング社⁺
代 表 六 車 秀 之